

## 山形花笠まつりの成立とその背景

福澤 光稀（東北学院大学大学院 文学研究科アジア文化史専攻）

本報告は、山形県山形市の中心市街地において行われる山形花笠まつりに着目し、この行事が成立する以前の段階の山形市の様子から時系列的に整理したうえで、成立に至った背景について検討し、その行事の展開および意義について考えようとするものである。

山形花笠まつりは毎年8月に行われ、中心市街地を練り歩く花笠踊りパレードを中心とする行事である。現在では山形県を代表する行事の1つとなり、東北絆まつり(旧 東北六魂祭)などにも出演している。その始まりは1963年(昭和38年)に、蔵王観光の推進などを主な目的として開催された蔵王夏まつりの付帯行事として行われた花笠パレードである。いまでは蔵王夏まつりの付帯行事であった期間を含め、2021年(令和3年)で第59回目を迎えていた。

このように成立時期が若く、また経済的な理由等を目的として成立した行事(祭り)について、民俗学においては神仏との関係性の有無や、その伝統性などの違いなどをもって、いわゆる「歴史的な祭り・祭礼」とは区別されてきたように思われる。また、行事が企画され行われてきた意義については、その時代的な変化も含め、より慎重な検討が必要であると思われる。併せて、山形花笠まつりに関しては、民俗学的視点から行われたと考えられる研究が管見の限り見当たらぬ。報告者はこうした新しい行事(祭り)に対しても、それが成立した背景や行事の意義などの丁寧な検討を行うことが、従来の祭り研究と同様に必要であると感じる。よって山形花笠まつりを対象とし、この行事が成立する以前の時期からの整理を通して、その変化を踏まえつつ、行事が持つ意義について明らかにしたい。

山形花笠まつりのもととなる蔵王夏まつりが成立する以前、山形市では同様に中心市街地にて開催されていた義光祭、山形まつりという行事が存在した。義光祭は大正2年(1913年)より行われた行事で、戦国時代から近世初頭にかけて山形の基礎を築いたとされる戦国大名の最上義光を祀ることが名目とされている。主に仮装行列を中心的な催しとして、当時はかなりの盛り上がりを見せていたという。戦後になると、この行事は山形まつりと改称され、行事の形は部分的に保たれながらも商工祭としての性格が強まっていく。このような変遷をたどってきた行事は、ついには蔵王夏まつりに置き換えられ、さらには山形花笠まつりへと移り変わり、行事の時期や内容も大きく変化していく。

このように行事が成立し、変化し、置き換えられていく背景には、それぞれその要因となった社会的・経済的背景が存在していると考えられる。本報告ではその背景を慎重に整理し、変わりゆく行事の姿とその背景をいかに理解すべきかについて提示できればと考えている。

現時点においては、猛威を振るう新型コロナウイルス感染症の影響により、聞き書き調査を行うことが大変難しい状況となっている。よって本報告では、主に新聞記事のような文字資料を用いて、行事の姿を検証するという方法をとった。また、この感染症の蔓延という事態が、山形花笠まつりを含めた多くの行事(祭り)に様々な影響を与えていることも確認されている。こうした現在の状況について理解し、それをどのようにとらえていくのかという点に関しても今後の課題になると思われる。本報告はその端緒として位置づけたい。